

# 手塚治虫作品『サボテン君』を語註釈する

萩原 義雄

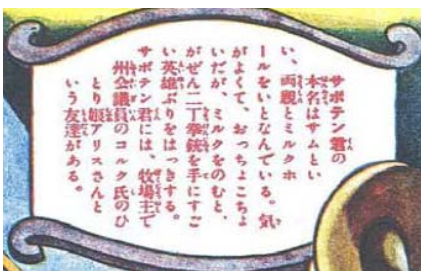
## はじめに

本書の掲載雑誌は「少年画報」（一九五一年）で、ちようへんせいぶかつげきまんが長編西部活劇漫画として。昭和二十六年の春に連載が  
始まりました。この年の正月に産声をあげた私にすれば、共に育成され歩んできた作品となっています。

サボテン君なる主人公はのつぽでがに股、ミルクを呑むと俄然強くなる少年です。第四回29齣に、「うー



サボテン君の本名はサム



い、ミルクをのんだら、もう百人力だ」といった場面（インディアンに捕らえられ、逆さづりに縛りあげられ、股裂きの刑にあうサボテン君、野牛のミルクを最後の別れにと所望します）が描かれています。さらに、作者が主人公サボテン君を紹介するのは、第六回の扉でのこと、「サ」といい、両親とミルクホールをいとなん

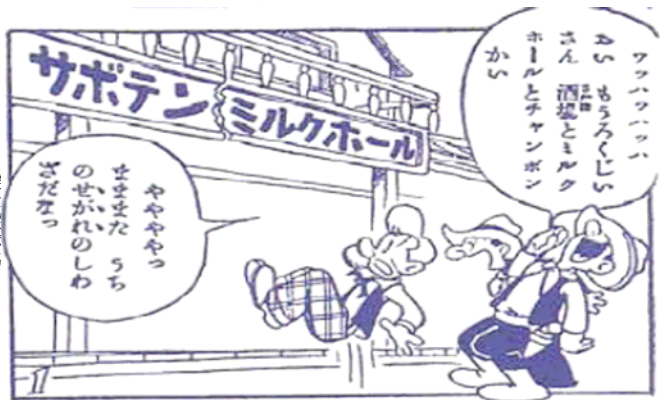
でいる。氣がよくて、おつちよこちよいだが、ミルクをのむと、がぜん二丁拳銃を手にすごい英雄ぶりをはつきする。サボテン君にはコルク氏のひとり娘アリスさんという友達がある」と……。だが、彼の身の上はこれだけではないという設定が第七回に用意されています。実はテネシーの大地主の子供であったのを父親であるシャツドが掠ってきたのだと……。サボテン君はこうして育ての親と別れて旅立ちます。

## 『サボテン君』の言語表現

この漫画における手塚治虫さんの言語表現は、実に多種多様と云って良いのではないのでしょうか。この一つ一つを精確に見つけ出し、分析してみる眼を養っていきましよう。漫画のしぐさは、しぐさとしてとてつもないくらいに活動的です。この動きを支えていく台詞せりふは、台本を用意して書き上げているではありません。せん。漫画における登場人物の動きに見合うことばが彼の脳裏からわき出様に上がってくるに違いなく私は確信しています。彼がいちいち、書庫にある辞典や典籍を取り出してきてきしつと書き上げるのは、作品構想が相当固まった歴史を舞台にした長編物『火の鳥』という作品などからではないでしょうか。

そういう意味で初期の長編物である『サボテン君』は、途方もない言語感覚の感性で手塚治虫さんが筆を走らせてきた作品だという位置づけを示しておくに格好な現代語の言語表現および語彙資料と言えましよう。洒落た表現もその一つです。また、しっかりとした識字に従った自筆手書き文字、ことばの置き換え表現、金言名句の譬喩表現、まだまだ尽きることがない言語表現がずっしりと詰まったことばの宝庫なのですから……。是非、その言語の誘う醍醐味を堪能していきましよう。

1、横書き文字の表現



①カタカナ文字左から右に横書きで、「サボテン／ミルクホール」と記載した看板文字が登場してきます。続いて、三齣に切り外した看板文字「酒場」を背に担ぐサボテン君が描かれ、この文字は漢字表記され、同じく左から右への横書き文字表記となっております。

客の男達が嘲笑するセリフをみると、「ワツハツハツハ、おい、もうろくじいさん、酒場とミルクホールとチャンポンかい」として、この漢字表記語「酒場」にふりがな表記で「さかば」と記載してこの漢字を補填しています。さらに、「ミルクホール」の意味を店主であるサボテン君のお父さんが「とぼけるな、なんべんいてもわからん子だ。うちは喫茶店じゃない。酒場だぞ!」と「喫茶店」で読みを「きつさてん」と詠むことを示し、語の置き換え表現をもって類語を教導していることに気づかされるのです。



②看板表記「ビルダール選挙ム所」(第一回21齣)カタカナ「ビルダール」は、人名、彼は今度州会議員に立候補するとの設定で登場してきます。ミルクを本当は好きでないのに呑めるふりをする。サボテン君を「サム」と呼称しています。次の「選挙ム所」は、正しくは「選挙事務所」と漢字表記するところですが、手塚さんは、「事務所」の「事」文字を草体表記し、「務」文字を「ム」とカタカナ書きしています。さらに、ふりがなについては、漢字の下に表記するという独特な表記法をここで用いているのです。

③横断幕「WEL COME／祝開通式」(第四回3齣)



黒猫が魚を持ち逃げ「ブラボー」「ドロボー」とフウセン会話は「ボー」ことば表現で洒落ています。この上の赤地の横断幕も左から右への横書きが用いられています。英字と漢字との組み合わせです。この「祝開通式」とは、鉄道が敷設され、蒸気機関車が西部に走ることを表現したものです。





## 2、セリフのなかの漢語

### ①「病馬」

「わることは出来ないもんだ……酒やの奴のたのみで、そつとあの馬車の馬を病馬ととりかえたけど……今ごろは途中でへたばっているだろうよ」「えーっ、病馬と!?!」「(第二回16齣)」

この「病馬」の語を小学館『日本国語大辞典』第二版では、

びょうば「ビョウバ」病馬【名】病気にかかった馬。\*落語・目黒のサンマ(一八九二)〈禽語楼小さん〉「病馬で御坐エますから今日は半日堪忍してやるべエと思つて馬ア引張つて江戸の町を帰つて参りますと」\*女工哀史(一九二五)〈細井和喜蔵〉六・一八「機械の間へ、どたと病馬の如く気絶して卒倒する痛ましきは」\*軍隊内務令(一九四三)五三「病馬を生じるときは通常朝手入後週番下士官に通報す」【発音】ビョーバ〈標ア〉「ビョ」

びょうぎゆう「ビョウギウ」病牛【名】病気の牛。\*遠方の人(補筆)(一九四六)〈森山啓〉四「結核の疑ひのあるホールスタイン種の病牛一頭を薄日のなかに追ひ出して放ち飼ひをする」【発音】ビョーギュー〈標ア〉「〇」

と僅かながらであるが、その収載を見ることばであり、初出例が明治時代であることが注目され、今日このことばは目にしない漢語の一つではあるまいか。時、平成二十二年五月、日本は「病馬」ならぬ「病牛」に見舞われて、宮崎県は和牛肉生産地として、てんやわんやであることをオーバールップするできごとになっています。

### ②「冥加」

「いのちみようがなやつだ。とつとといっちまえっ」(第五回30齣)

小学館『日本国語大辞典』第二版には、

みようが「ミョウガ」【冥加】「名」仏語。①冥々のうちに受ける神仏の加護。

知らないうちに受ける神仏の恵み。また、偶然の幸いや利益を神仏の賜うものとしてもいう。\*今昔物語集(一一二〇頃か)一七・一五「冥賀人に勝れて、道俗・男女・宗と敬て、肩を並ぶる輩無し」\*正法眼蔵随聞記(一二三五〜三八)四・八「一日示云、人は必可修陰徳。必有冥加顕益也」\*正徹物語(一四四八〜五〇頃)上「此道にて定家をなみせん輩は、冥加も有るべからず、罰をかうむるべき事也」\*日葡辞書(一六〇三〜〇四)「Mio<ga>(ミョウガ)〈訳〉「幸せ」\*浄瑠璃・菅原伝授手習鑑(一七四六)一「身の恥頭はす鑄刀、今日迄人手に渡さぬ武士の冥加」②(形動)ありがたくもつたいたないさま。冥加に余るさま。\*読本・昔話稻妻表紙(一八〇六)四・一三「こは冥加なるおん詞、ありがたきまでにおぼへはんべり」③神仏などの加護・恩恵に対してするお礼。報恩。\*実悟記(一一五八〇)「代物をつつませられ被下候間、各為冥加候間、代を被下候を斟酌申



候へば」\*浮世草子・日本永代蔵(一六八八)六・三「今日吉日なれば、薬代を**みやうが**のためにつかはしたし」\*滑稽本・風来六部集(一七八〇)「放屁論追加「人と生し**冥加**の為、国恩を報ぜん事を思ふて心を尽せば」\*読本・椿説弓張月(一八〇七〜一一)「残・六一回「夜はまだ深き大将の恩恵思へば今更に、**冥加**ありける亡妻の、年経て後の葬は、棺にあらぬ檜原」④「みようがきん(冥加金)①」の略。  
\*浄瑠璃・新版歌祭文(お染久松)(一七八〇)野崎村「ヤアさつきに渡した此銀を、ヲヲ表向で請取たりや事は済む。改めて尼御へ布施せめて娘が**冥加**じゃはいのふ」\*妙好人伝(一八四二〜五二)初・下・加州与市「朝夕御本山の方へ拜礼して(略)一銭二銭づつ毎日御**冥加**を指上て」⑤「みようがきん(冥加金)②」の略。\*地方凡例録(一七九四)五「運上と云も**冥加**と云も同様といへども、急度定りたる物を運上と云」\*代官触留(三・天保二三年(一八四二)七月八日御請(古事類苑・政治八三)「諸運上、**諸冥加**之類」⑥身分、また職業を表わす語の下に付けて自誓のことばとして用いる。その者として違約や悪事をしたら神仏の加護が尽きることがあっても仕方ないの意。\*浮世草子・好色一代男(一六八二)七・六「あの君七代まで太夫**冥加**あれ」\*浄瑠璃・山崎与次兵衛寿の門松(一七一八)上「吾妻を見込んで頼むとは、いとらしい婆さん傾城**めうが**聞気でごんす」【語源説】冥官加護の略「志不可起」。【発音】**ミヨウガ**(標ア)「ミヨ」(ア史)江戸●●〇(京ア)「ミヨ」【辞書】色葉・下学・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・日葡・書言・へボン・言海【表記】**冥加** 色葉・下学・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言・へボン・言海

とあつて、言古き仏教語がこのように用いられていることになります。

### 3、セリフのなかの和語動詞「さびれる」 類語表現に「すた・れる【麿】」。

○「ふふん、これでひと安心だ。鉄道で都の品物を運ばれちゃあ、おれさまの商売が**さびれる**」【第四回22齣】

○「ビルダール貴様は自分の店の**さびれる**のをおそれて鉄道をおそったんだな」【第四回23齣】

○「みんないっちゃうわ。この町は**さびれる**わね」【第五回7齣】

この「さびれる」の語は二度登場しています。小学館『日本国語大辞典』第二版では、

**さび・れる** 【寂・荒】(自ラ下二) **文** さび・る (自ラ下二) ①盛んであった人の往来や出入りが衰える。

にぎやかでなくなる。また、隆盛であったものが衰微する。\*随筆・賤のをだ巻(一八〇二)「其頃より開帳も**さびれて**造り物工みて上る沙汰もなし」\*交易問答(一八六九)〈加藤弘之〉下「矢張商売も盛んになるどころの話ではなく、反つてだんだん**さびれて**きた故」\*春酒屋漫筆(一八九一)〈坪内逍遙〉梓神子・六「若夫只今世話物の少く**さびれ**なんとするは元より世話物の罪にあらず。世話物作者の多数が大ならざるが為のみ」\*放浪記(一九二八〜二九)〈林芙美子〉「今まで働いてゐたカフェーが寂れると、お君さんも一緒にそこを止めてしまつて」②荒れはてる。荒廢する。\*あひゞき(一八八八)〈二葉亭四迷訳〉「眼に遮る物象はサッパリとはしてゐれど(略) **さびれ**はてうちにも、どうやら間近になつた冬のすさまじさが見透かされる」\*春は馬車に乗つて(一九二六)〈横光利一〉「長らく寒風に**さびれ**続けた家の中に」③人の気配や、人工的な設備がなく、自然のままに閑寂である。\*秘密(一九一一)〈谷崎潤一郎〉「却つて市内の何処かに人の心附かない、不思議な**さびれた**所があるであらうと思つ

てみた」【方言】しおれる。《さびれる》島根県725【発音】〈なまり〉シヤビレル〔静岡〕〈標ア〉「0」  
「レ」〈京ア〉（0）／「0」文「さびる」〈標ア〉「ビ」〈京ア〉（0）／「0」【辞書】へボン・言海【表  
記】【寂寥】へボン【荒】言海  
とあって、江戸時代後期にその初出例を求めることができます。

#### 4、セリフのなかの慣用語

##### ① 棚からぼた餅



「ありがたい。たなからおちてきたのはぼたもちじゃない。ミルクとききた」〔第五回39齣〕  
小学館『日本国語大辞典』第二版に、  
たなから牡丹餅 思いもかけない幸運。労せずし幸運を得ることのたとえ。儻倖。たなぼた。\*譬喩尽「一七八六」棚から牡丹餅落したやうな\* 諺苑「一七九七」「たなからぼた餅のおちたやう」\*遅過ぎた日記「一九五四」〈長与善郎〉熊本旅行・一〇月一日「のん気な亭主はあくまで他力本願、棚から牡丹餅を予想して悠然と構へてゐるのに」とあり、江戸時代から慣用された句であることが判ります。

#### 5、セリフのなかの漢文訓読



「君に従わんと、ほつすれば親に孝ならず、親に孝ならんとほつすれば……」  
と訓読する原文は、「君欲レ従者親不レ成レ孝、親欲レ成レ孝者……」といった漢文が想定できるのだが、この文言に該当する典籍を『孝經』かと推測してみたが未だ見出せません。調査続行中です。  
漢文訓読の素養は、つい一頃までは誰もが口ずさみ、それがいったい何を伝えていたのかを知らず知らずのうちにも子供達は成長していきました。この「孝」の精神を手塚治虫は、なんと何気なくこうした金鉞脈探しに旅立ちする親子の姿のなかで表現しています。漫画の教導性を実践していたとも見えますが、これを何に依拠するのかを確かめることも語註釈の大事なあり方なのです。  
ですが、この文脈はどうしても見いだすことが出来ません。その理由は、手塚さん自身が考え出した言い回しかもしれないからです。何処でどのようなこの漢文素養を手塚さんが身につけていたのかを知ることが肝要なのでしょうが、その手がかりを見極めていくことが実は困難なくらい、才学知性を働かせねばなりません。

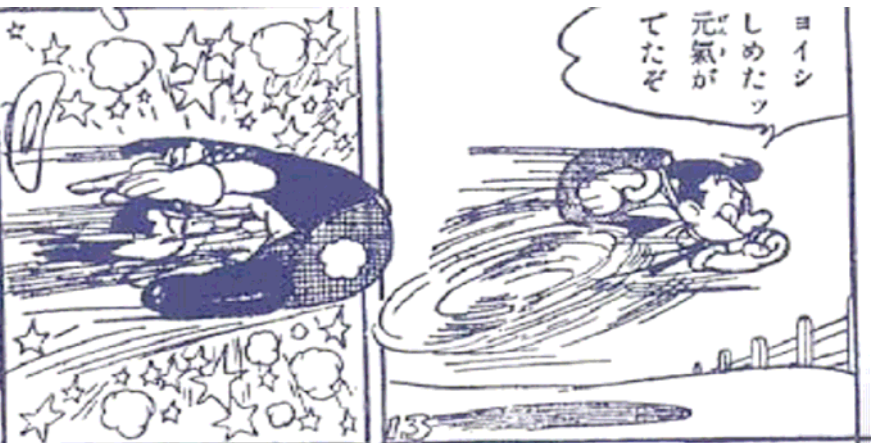


## 6、セリフのなかの言語遊戯法



「馬だと、この馬かめ、馬馬としてやられるとは、なんだ馬馬しい」〔第九回 17齣〕

ここには、「馬」づくしによる「うま」ことばの表現が用いられています。こうした言語遊戯的なセリフを彼は何気なく思いの俣に表出しているのです。これを全部、漢字だけにして示しますと、「馬馬か馬馬馬馬」になっています。このように同字を畳み掛けて表現する方法は、日本人の歌の修辭技法に通じています。歌の修辭法が編み出され、ここまでに高度なものへと変容していく過程を見極めていくことも、強ち遠回りにはならないと私は考えます。



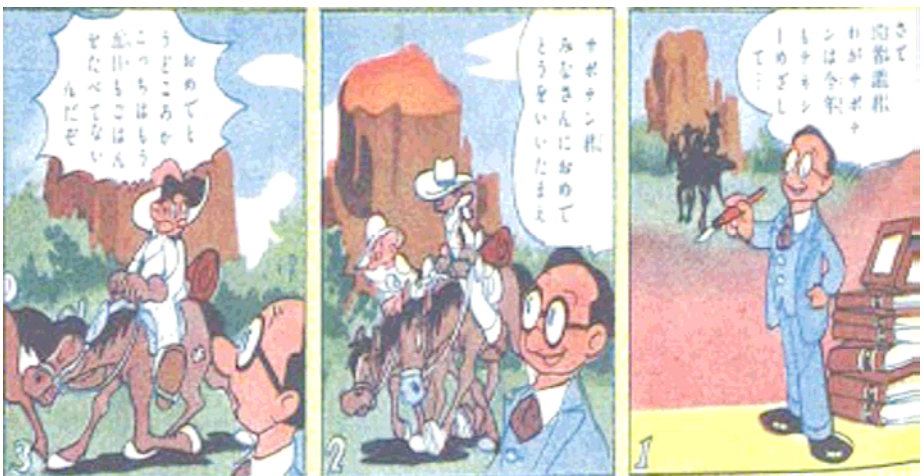
### 『サボテン君』の絵画表現

ミルクを呑むと元氣百倍となったサボテン君を超迫力タッチで表現しています。回転走りして敵手に体当たりし、連打連打を繰り返す手法がここには見えています。このとき、左から右へと走らせる。この手法は、舞台の袖から飛び出すとき逆手の方向を示しています。このときの勢いを効果的に表現するには、引き下がるのではなく立ち向かう場面を表現するためには、この下手から上手に描き出す手法を手塚さんはここで美事に具象化しています。これと同様なシーンの齣を自らの力で見いだしていきましよう。

「ヨイシ、しめたッ。元氣がでたぞ」〔第八回13・14齣〕



この齣は、ちよつと妙趣です。そう馬にハットを被せ前足に拳銃を、腰に拳銃ホルダーを付けさせています。当に擬人化して表現したものです。ですが、セリフ部分を見てください。「ブルブル、ブルツ、ヒヒーン」〔第九回15齣〕と馬語で表現しています。この意味は、「銃を捨てて手をあげろ！」とでも云うところでしょうか？



手塚治虫自身、この漫画に登場してきてこの巻の初めと終わりのそれぞれ3齣を用いて、主人公サボテン君と私たち読者に語りかけると云った独特な技法をもって展開していきます。

手塚自身「さて、読者諸君。わがサボテンは今年もテネシーめざして……」「第九回1齣」「サボテン君、みなさんにおめでとうといいたまえ」「第九回2齣」「おめでとうどころか、こっちはもう五日もごはんをたべてないんだぞ」「第九回3齣」で始まり、最後の3齣は「サボテン、もうページがないおしまいだよ」「第九回54齣」、「こんな子どもですが、どうぞ今年もよろしくたのみます。新年おめでとう」「第九回56齣」

といった3齣中に三度連続して自画像が描かれているのです。55齣めは、なんとサボ



テン君に銃で狙い撃ちされ、被っている帽子と懸けている眼鏡を飛ばされています。このときサボテン君は、手塚さん自身に、「そんなめちゃくちなはなしってあるか。まだごはんもたべてないんだぞっ」と抗議しているのです。これに応えて画中のサボテン君にパンをソーセージを鳥肉をふんだんに食べさせている絵を描き満足させています。手塚治虫さんは食べたのかなあと読者の心を心底くすぐっています。

## まとめ

今回は、全部まとめるには到りませんが、重要な箇所を丹念に見ておきました。この流れを十分に汲み取ることができるよう今後の課題としておきましょう。まだまだ緒に就いたばかりの漫画学による言語表現の研究なのです。そして、彼の作家方法が現代の漫画家にどう影響してきているのかを考察する上で、その基底と成る手塚治虫漫画をしつかり読み進めておく必要性を感じています。

〔課題〕第一回から第九回までの資料をもとに語註釈を試みてきました。このあとの部分をあなた自身が見極めたところを語註釈にしてまとめてみましょう。このとき国語辞典はその語の用例をふんだんに用い併せている小学館『日本国語大辞典』第二版が役に立ちます。ぜひ、ご自身でそのことばをまず調べることから始めていきましょう。そのうえで、何をどう捉えられたのかを明らかにしていきましょう。